

令和6年度 第2回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和6年11月14日（木）18：00～19：30

場 所：川崎市役所本庁舎 102会議室

出席者：卯月委員、岡田委員、高橋委員、小林（進）委員、中谷委員、浦山委員、宮越委員、小林（勝）委員、百瀬委員、稲葉委員、石村委員

（事務局）小田嶋教育長、池之上教育次長、佐藤総務部長、岩上教育政策室長、小澤学校教育部長、大島生涯学習部長、大野総合教育センター所長、堅月教育政策室担当課長 他

欠席者：倉持委員、松田委員

傍聴者：なし

司 会：堅月教育政策室担当課長

【配布資料】

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 次期かわさき教育プラン策定に向けた意見聴取について

【次第】

- 1 開会
- 2 教育長あいさつ
- 3 次期かわさき教育プラン策定に向けた意見聴取について
 - ・グループ協議（全体協議に向けた協議のため、摘録では割愛）
 - ・全体協議

議題 次期かわさき教育プラン策定に向けた意見聴取について

小田嶋教育長：ありがとうございました。

グループ協議で出ました御意見を踏まえて、各委員のお立場から全体に向けて、感想でも構いませんし新たにお感じになったことなど御意見いただければと思いますが、テーマで分けていきたいと思います。重なってもいいかなと思うのですが、テーマ1に関していかがでしょうか。

浦山委員：今回、資料を事前に配布いただいて、3点ほどテーマ1になるのかなと思いながら考えました。

1つは、よく先生方がおっしゃっている川崎らしさというのをやっぱり盛り込みたいというか、あったらいいねと思っています。

もう1つは、子どもたち、大人もですが、ありたい姿とかあってほしい姿など、そういったことの具体的な方法論みたいなものが、教育の中にあったらいいのではないかと思います。あとは、AI等の道具をうまく活用して、人でなければできないことに活用できないだろうかということをおもいました。

川崎らしさという点でいきますと、本当に先端から里山まで非常に広い範囲のものを持ってい

ますので、教育関係の人たちだけではなくて、いろいろな形の人たちの能力が子どもたちを育てるということに活用されたいのではないかというふうに思います。

それから、子どもたちのありたい姿、またはあってほしい姿の具体策ということで、何回か前の会議で高橋委員が、公立の小中高がそろっている自治体というのは実はあまりないので、川崎って非常にそういう特徴があるということをおっしゃっていたと思うのですが、そういう小中高の一貫したテーマみたいなものの中で、何かできたりしないかなというふうに思いました。

例えば、ウェルビーイングへの4因子（ありのまま、ありがとう、やってみよう、なんとかなる）といったことを各年代に合わせたやり方でうまく伝えられるような柱があったら、面白いのではないかというのを思いまして、そういう具体的な方針といったものが載せられればいいのかと思いました。

そのほか、AI等の活用ですが、ある方にちょっと伺ったら、例えばウェルビーイングは血の通った人間というか、本当に人でなければできないことでやる。しかし、機械でやれることもたくさんあるということで、ウェルドゥーイングなんかはAIにやらせればいいのかと思います。そのコンビネーションみたいなことを考えればいいのか、という話がありましたが、働き方改革とか、いろいろな形で課題を考えている、人も足りないなど、いろいろなことがあり、やはり生産性、創造性というのを上げていく必要があると思いますので、機械もううまく使いながら、血の通った人がやれることをやっていくというような形に、質的な変化をもたらしていくということも必要なのかなと思いました。

宮越委員：先ほどのグループ協議の中でも話しましたが、1つの視点としては、加賀市のビジョンで「Be the Player」という言葉がありますが、教育というのは学校の先生だけのことでなくて市民、保護者、そして子どもたち、それら全てが当事者として関わっていく、そういう意味で私たち社会教育委員ではよく言っています。学校と地域が連携してつくり上げる、子どもと大人の豊かな学び合いの社会という、これは最後のほうの渋谷区の「未来の学校」という表現に結びついています。これは、私たちが言う未来の社会、学び合いの社会というような結びにするのが、すごく社会教育を担当している身としては張り合いが出てくるという印象です。

本当は、家庭や地域でやらなきゃならないことも、みんな一緒に学校が背負っちゃって、今、大変な状況で、それを他のプレーヤーに引き渡していくようなことが学校教育改革、あるいは働き方改革なのではないかと思っています。

それから、川崎市の基本理念は、「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」となっています。本当にすばらしい表現だなと思いますが、斜に見ると、未来志向というものに少し傾斜しているような響きが、私の中に違和感が少しあります。将来のために、今備えて受験勉強しなさいという理屈が結構あるけれども、そうではないし、学び自体の楽しさや、やりがい、生きがいといった現在のその子に関わる、ウェルビーイングもたぶんそこに絡んでくると思うのですが、将来の夢に向かって今を犠牲にするというようなことにならないような付け足しか、もしくはもっといい表現があるのか、そういうことを工夫していただきたいなということです。

高橋委員：このアンケートのまとめを見ますと、一人ひとり自分事にとり、行動を促すような言葉がいっぱい書かれておりますので、基本的には一人ひとりが行動するというようなことが、1つメッセージに入るのかなというふうに思っております。

教え授けるみたいな時代から、やはりその子その子にそれぞれ、潜在能力といたら言い方が大き過ぎますけども、何らか隠れた能力が必ずあるはずで、そういうものを引き出していくし、自分から引き出していく、先生も協力していくみたいな意味で、自ら育つみたいなことが1つ重要なポイントだと思います。

これが、いわゆる学習指導要領とかでも言われるような、生きる力みたいなことも大体そういうような趣旨になっているかなというふうに思います。

僕は、実はテーマ2のほうが非常に大きい課題だと思っております。なので、今の理念が非常にすばらしいので、このままでも僕はいいのではないかと考えているくらいです。ただ、なぜテーマ2が存在するのかと考えたら、今の理念が実現しているかということが、少し怪しいのかなというか、そういう意味でどうやって広めるか、ということが大事なんだと思います。

川崎市だけの問題じゃないですけども、この手の理念というのは、我が国が掲げている教育の理念というのは、僕は世界最高水準だというふうに思っています。例えば、各教科の成績もPISAを見ると、世界最高水準だと思います。理念も世界最高、各要素も世界最高なのに、どうして僕らはこんなに時間を使って働いたり勉強したりしているのに、非常に今、厳しい状況に置かれているのかということを考えると、やはり理念と要素との接続に対する考え方が非常に緩いというか、ほとんど考えられていないからじゃないかなというふうに思います。

だから、変な例だと思いますけれども、例えば先生方は、各教科の先生方、小学校の先生も、やはり学習指導上、教科の本質を追求するということを繰り返し言って、やはり教科も非常に細かいところを指導して、徹底的に教科の細かいところを議論するんですよ。

でも、例えば指導要領で言うところの生きる力から見たら、各教科なんて要素にすぎず、教科の本質を追求するというよりかは、生きる力の本質を追求していく中で、教科も手段として存在するぐらいなのに、実はその手段が目的化していて、理念不在といったことが起こるとか、例えば理念と各教科を結ぶ考え方として、カリキュラムマネジメントとか、三つの柱とか、そういうふうに学習指導要領で考えられているにもかかわらず、カリキュラムマネジメントといたらそれを教科と同じ位置に、カリキュラムマネジメントの充実というと、必修教科の充実と同じように並べてしまったり、本当はそういう要素ではなく、まず各要素をつなぐものであり、もう1つレイヤーが違う話なのに、やはりいろいろ短冊型で併記していくみたいな、短冊型で評価していつて、一つひとつの授業評価が高かったりするけれども、なかなかそういうのがうまくいかないのではないかなというふうに思っています。

やはり、評価の仕組みというのが結構大きいところがあって、授業も、役所でいう各事業も、それに対して評価があり、やはり大人も子どもも評価がないところはなかなかやらないので、その生きる力というのは評価しにくいし、生きる力と各要素をつなぐ部分はもっと評価しにくいので、皆さんやられないんだなと思うと、僕はそういうことをしなくてもできたらいいのと思うのですが、そのつながりの部分を何とか評価する仕組みとかチェックする仕組みを、逆手に取ることもできるのではないかと思います。

先ほども話題にありましたが、川崎市は小中高、特別支援、全ての学校があって、採用から研修までが一貫してできるというのは政令市ぐらいしかありませんし、僕はいろいろなどころに行きますけど、それでもこんなに仲が良く教育委員会とやれるところというのは非常に珍しいところだと思いますので、そういうのを逆手にとって、一番下世話な話だと、教員採用試験にこの理念を必ず出題するぞといって、あなたはどんな理念から教育をしたいのかというのは必

ず400字書かせるぞと言ったり、最終的に募集要項といって募集の段階で書かせておいたり、そういうふうやっていくという可能性だって、ほかのところは理念がいろいろ自治体によって変わってきたりするわけで、試験に出せないわけですね。

だから何か非常に下世話ではありますが、無理をして評価する必要はないと思うんだけど、できるところを逆手に取ると、そういうアイデアも出てくるかな、なんていうふうに思ったところなんです。

小田嶋教育長： 今、テーマ2に関わる部分がすごく大事だということで、理念は今のままでも素晴らしいとお褒めいただきましたけど、それをどうやってみんながしっかり理解しながら、共通認識して教科の中に生かしていくのかということかなと思いました。

今、教科の本質の話を現場の先生たちがこだわり過ぎているのではないかなというふうなお話で、先ほど私もグループの中で、そういう人もいるだろうけど、やはり今の「生きる力を育てる」というのは、もっと広くやっているかなという意識があるのですが、現場的な感覚から言うと、小林（勝）委員はいかがでしょうか。

小学校だと各教科をやるから、また中学、高校とちょっと違うかもしれないですね。上に行くほど、そこにこだわり過ぎるというのがあるのかもしれないですけど、テーマ1、2と少し外れるかもしれませんが、現場から見えていかがでしょうか。

小林（勝）委員： ありがとうございます。

今の教育長の話とずれるかもしれませんが、今、本校にも実際に授業をやって、子どもたちの声を聴取して、子どもたちは意外に、いわゆるGIGA端末というのをいっぱい使っているといったときに、求めているのはやっぱり優しさとかコミュニケーションってよく言っています。裏返して、やっぱりいろいろなことが今、おうちに帰ってもみんな公園に行っても、ゲーム機を持ってパチパチやっているような形が多いところで、だから僕は今ここで浦山委員と、川崎らしさって話があったのですが、地域や家庭を巻き込む何かホームタウンみたいな教育というのが、学校教育からちょっと離れて今、必要なのかなというふうに思っています。

今、私は小学校では社会科のほうを中心にやっているのですが、子どもたちがある社会科の授業で発言をしたことが、次の日になって変わっているときがあります。今日、僕、社会科の歴史でこんなことを学んだけど、とよく聞いてみると、おうちで話をしているんですよ。歴史の好きなお父さんがいるから、話し合うとそういう考えもあるんだといって、次の日の授業の内容が変わっているときがあるんですね。つまり、意欲が連続する学習というのを大切にすると、家庭とか地域を巻き込んでいく学校教育というか、社会教育というのが必要なのかなというふうに改めて思っています。そんなの今までもやっているじゃないかとか、今、GIGA端末が入ってきたから余計、行間の学びというのがすごくできているかなというふうに思っています。

基本理念や目標と離れますが、つまり川崎らしさって僕は区ごとに特徴があることだと思っているんです。細長いので、川崎区と麻生区、多摩区と違うと思うんですね。そうすると、おそらく生涯学習施設、図書館も僕は蔵書が変わっていいと思っています。外国籍のお子さんが多い地域は、やっぱり母国語が並んで、本がたくさん並んで入っていたりとか、そう考えてくると、区ごとに公共の生涯学習センターみたいな施設をつくって、自分が学びたいものを、そこで学べたり、小学1年生と6年生や高校生と一緒に英語の勉強やったり、そんな時代が来てほしいなとい

うふうに思います。

今、不登校で悩んでいるお子さんも、学校には行けないけど、そういうところに行って、僕はプログラミングをやるんだとか、僕は料理を勉強するんだとか言って、自分で選んで学習し、そこで小学生と60、70歳の先輩たちと一緒に勉強したりとかということで学べるような、そんな空間ができれば、家庭も地域も巻き込めるような生涯学習施設といった教育の方向性ができるというのが、夢物語ですけど、そんなようなことも少し学校教育から離れて考えたところですよ。

小田嶋教育長：テーマ1、2に限らず、今も少し範囲を広げた御発言だったかなと思いますけど、本市の教育が大切にすべき価値観、考え方となっていますけど、本当にそういった具体的なことでも結構ですが、全員に御発言をいただきたいなと思っています。両方合わせた御意見でも構いませんので、いかがでしょうか。

岡田委員：話に入る前に、今日のこのアンケートの取り方のすばらしさ、それから、この形式での会議のやり方のすばらしさ、これは川崎市の教育の持っているすばらしさが僕は表れているんじゃないかというふうに思うんですね。今日はこれからのことについてなのですが、まず第一に、川崎におけるすばらしさをしっかり認識するというか、川崎のこれまで積み上げてきたものが、すばらしいというか、その延長線上にしかないの、そこをしっかりと確認できるようなものが必要なのではないかというふうに思いました。

そういう意味で、テーマ2について、価値観や考え方を市民と共有するために、というので、資料に書いている市民一人ひとりが学びの主役であり、学びの主体となることが重要であるということは、これからの学習や教育の中で、この視点がすごく大事なのではないかというふうに思いました。

表し方ですが、グループ協議の中で私が申し上げたのは、たしかに渋谷区だとか、いいんですけども、やっぱり文字が多いので、文字じゃなくて、文字でいいんですけども、何かコンセプトマップのようなもので表してしまうとか、私心理学部ですから、例えばパス図とかベン図というのがあるんですが、何かそのような形でビジュアライズして示していくのもいいんじゃないかと。平たく言っちゃうと、過去の川崎の教育と、これから目指す教育の相関図が現れるというか、そんな形でお示ししていくといいかもしれないなというふうに思いました。

それから、11月13日に行われた中教審の中でも出ているんですけども、今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会論点整理というのが出ているんですけども、2030年度の未来が想像以上に早くなっているの、これまで現行の学習指導要領で考えていたものが既に到達していて、そこをどういうふうにしていくか考えたときに、教育振興基本計画の中で示されている、いわゆるウェルビーイングの考え方がすごく大事だというふうに思っていて、川崎市の新しい教育プランの中にそういったものの要素が入れられないかなと思っています。

私が思うには、答えのない問題を教育現場で実施率を上げていくためには、学習者本位の教育が絶対必要で、その学習者本位の教育という視点が入れられるといいなって。ここで勘違いしてほしくないのは、学習者本位というのは教員が何も教えないで、子どもたちが全部やっていくということでは全くなくて、しっかり教員が教えた中で、学習者、つまり子どもたちが自分で問題を見つけていって、それを解いていこうとしたときにどうするかということにつながるんだと思

うので、そういう意味での学習者本位という。

それから、私が考えるウェルビーイングへの対応では、獲得的な要素と協調的な要素を向上させる、つまり、既に持っている、既に学んでいることに新たに協調的な要素を入れて向上させることが大事なので、別の言葉で言うと、利他性、一緒にやっていく協働性、それから社会貢献意識の向上、さらに言うなら自己肯定感のようなものの獲得というものが目指せるといいのではないかなというふうに思っています。

そういうことを踏まえて、教育理念とか目標について、例えば調和と協調という言葉を入れるのも手かなというふうに思いましたし、「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」ということは、このままでもいいと思うのですが、さらに言うなら「豊かで幸福な人生を送ることができるための教育」とか、あるいは「豊かで幸福な人生を送ることができるようにするための学びを築く」とか、そんな言葉も必要なのではないかというふうに思いました。

それから、学ぶことの楽しさであったり、それから情報活用能力なんていうのがあるんですけども、これも先ほど言ったように、川崎市が既にやっていることのすばらしさの前例の上で進むべきだというふうに思っているので、目新しいことを入れるというより、私たちが行っているこの前提を踏まえてこうなんだというのを示していったほうが、よりいいのかなというふうに思いました。

もっと言ってしまうと、何度も申し上げたように、カリキュラムメイキングをしてもいいのではないかと思います。もちろん、学習指導要領の範囲内で、ということになりますが、川崎市の現状を踏まえたら、もっと今の制度を使って川崎市独自のカリキュラムメイキングをすることも必要ですし、例えば、今、不登校の子がこれだけいるけれども、どう考えたってオルタナティブの学校がないんです。つまり、今の学校教育の中で代替の学校がないので、そういったものを川崎市独自でもっと考えていって、つくってしまうのも手じゃないかなというふうに思っています。川崎市の子どもたちと川崎市の現状を考えたとき、川崎市独自のオルタナティブか、代替の学校になるようなものを、現状の法律の範囲の中で考えていくというのもありだと考えています。それら全ては、一番大事なコンセプト、川崎市が大好きな子どもをいかにつくっていくかということが根底にあって、もっと言えば川崎市が大好きな人を教育の中で培っていくというのがあっていいのではないかなというふうに思いました。

小田嶋教育長：川崎市が大好きという話と、先ほどは川崎らしさという話があって、その2つに共通する部分もあるのかなと思いますが、いかがでしょうか。今までの御意見を受けてもいいですし、御自身がグループ協議の中で発言されたものを皆さんに共有いただいてもいいです。

卯月委員：私は、少し目に留まったアンケート結果があります。資料9ページの多様性を尊重する力について、たぶん川崎市の子どもたちは大事にはしているんですけども、上から3つ挙げるという回答方法だと挙がってきていないということだと思います。その背景として、事務局から1つの解釈としてはそれが既に当たり前になっているからではないか、ということもお聞きしました。たしかに、全国的な傾向と比較できるわけではないですけども、大人がこれだけ多様性を尊重する力が大事だと回答していることは、川崎市のすばらしい特徴なのかなと思います。他者を理解しなければならない経験が豊富にある大人のほうが、やはりより多様性を意識するようになっているのかもしれませんが、それに対して、子どもはもしかしたらまだそういった経験が

比較的少ないために、こういった結果が出ているのかなと感じました。

そういったところを考えると、子ども同士で学校の中に閉じず、社会に広く出ていくというのをますます強調していいのかなと思ったところです。

一方で、その多様性を尊重する力を大事にするというところを、資質能力のみに落とし込まず、どうやって多様性を尊重する環境づくりをしていくかも重要だと思います。これだけ支持されていることなら、環境づくりや制度設計のところでも大事だと思いますので、先ほど小林（勝）委員がお話しされていた生涯学習センターといった社会教育の場をつくっていくというような取組も、非常に大事だなというふうに思いながらお聞きしました。

言葉の部分については、すでに川崎市が掲げている理念がすばらしいということは賛同します。資料3の1ページの基本理念には、「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」とありますが、言葉を変えるにしても、趣旨はそんなに大きく変えなくても、引き続き大事にしていくべき考えだと思いました。

ただ、基本目標のところにある「自主・自立」の「自立」の漢字が「立」ではなくて、「律」のほうが基本理念の意味に合っているのかなというふうにも思いました。というのは、「自立」というと、自分で自分の身を立てなければいけないということが強調される懸念があります。それも大事ですが、困っているときには人の助けを借りていいと思います。みんなと協力することは、もう1つの「共生・協働」という言葉に込められているかもしれないのですが、自分の大事にしていることを守って自分が生きたいように生きていくという意味合いだと、「立」という漢字より「律」のほうがより良いのではないかなと思いました。

ただ、コンセプトを維持しながらも表現はもっと違う方向に、文字ではない方向にしていくというアイデアもいいと思いますし、可能性はいろいろ開かれていると思います。

小田嶋教育長：皆さんがおっしゃっていただいている今の基本理念はそのままでもいいくらいだというのもあったんですけど、これをベースにしていくということと、先ほどのテーマ2のほうにも関わりますけど、「自立」の問題もありましたが、どんな形で示していくのがいいのか、もっとメッセージ性のあるものがあるのか、その辺のところも御意見があったところですけど、ほかの委員の方に聞いていきたいと思います。

稲葉委員：これまで皆様のお話を、僕はすごいなと思って聞かせていただいていたいました。

テーマ2について、グループ協議の中で加賀市のスローガンはこれだけだとよく分からないという話をしたら、事務局の方がこの後に理由が書いてあるというふうな話をされて、あ、そうなんだというふうに思いました。それで、思いつきで恐縮ですが、どうやって広く共有して発信するのかということを考えると、私はもし、川崎も仮に同じようなことをするとしたら、児童生徒向け、教職員向け、市民・保護者向けのように分けて、何か発信するメッセージを書いてもらったらいいんじゃないかなとすごく思ったんですね。

私は、そういう認知特性なので、文章で書いたほうが分かりやすいと思いますけれども、教職員がやっぱり元気になったり、もっと今よりも元気になってやる気になって、やってやるぞみたいな、そういう気持ちがすごく湧いてくるようなメッセージを、やっぱり発信してほしいなって、すごく思っています。最近特にそのように思っています。自分も35年前に川崎市に就職したとき、そのときの気持ちをまだちょっと覚えているんですけども、そういうことがいつまでも忘れ

ないで思い出せるような、そんなメッセージも発信したりすることで共有できるといいのではないかな、と思いました。

小林（進）委員：資料を読んだとき、川崎市は非常に難しいことに取り組もうとしているという印象を受けました。グループ協議で高橋委員からも話がありましたが、今まで学校教育では、成績は科目ごとに知識とか問題を解くスキル、つまり定量化しやすい評価、私も大学とか専門学校で教えているのですが、点数をつけられる評価をしています。しかし、今話題になっていますコンピテンシー教育に川崎市は取り組むというイメージを持ちました。

実はこれ、本当の意味で行おうとすると非常に難しいと思います。知識とかスキルは教えられます。しかし、その中に持っている生徒個人の価値観、得意なこと、特徴など、そういうものが学校教育の目標と一致したときに、一番伸びます。そこが非常に難しいところで、そこは高橋委員が言っているように評価しにくいところです。実は私は日本技術会で若手の技術者をどう育成するかという検討を6年間やっていますが、良い方法がなかなか見つかりません。気づかせる教育、それが非常に重要だと思っています。

その中で、実は私に小学校6年生の孫がおり、川崎市内の小学校に通っています。私は横浜市で理科支援員をしているため、6年生の理科の実験にたたき染めの実験があることを知っていました。そこで、孫に「たたき染めの実験をした？」と聞いたら、「しゃぶしゃぶで終わっちゃった」と言いました。そこで、「じゃあおじいちゃんと一緒にやろうか」と言ったら、「うん、やる」と言ったので一緒に行くことにしました。そこで、家にあるヨウ素入りのうがい薬とキッチン用の漂白剤を使って行いました。小学校の教科書ではエタノールを使って漂白させますが、キッチン用の漂白剤の方が簡単で、ヨウ素反応も出やすいと思います。孫に行わせると、「わっ！」と感激したんです。

それを夏休みの宿題にと言い出したので、私もいろいろアドバイスはしましたが、孫は自分なりに模造紙に書いて提出したようです。しかし、先生から何も反応が無いと聞いています。これでは、孫がかわいそうではと思います。おそらく、先生方は忙しく、一人ひとり見切れないとは思いますが、授業の実験でうまくいかなかった実験を、家で行って結果を出したものに対して、当然、親が手伝っていると分かっている、というふうにやったのかとか、何か反応があっても良いのではないかと思います。

このような成功体験や、自分で行い、成し遂げたという経験が、おそらく大人になってからの自分の価値観になると思います。川崎市が目指そうとしている教育は、このような教育かと資料を読んで思いました。

百瀬委員：すごいなと思いながらお話を伺わせていただきました。

今回、このアンケートの中で、やはりどの子ども全体的に夢を持てる、主体的に行動できる、思いやりがある人という、この3つの柱が非常に印象的でございました。現在の教育プランの基本理念の中にも「夢や希望を抱いて生きがいのある人生を送るための礎を築く」というところで、そこは同じものなのかなと、さらにそれをグレードアップしたものが良いのではないかなというふうに思いました。

また、先ほどから出ている川崎愛であるとか、川崎らしさというふうなことも何か盛り込めて、最終的にはやはり子どもたちの幸せというものが、子どもたちでも分かるような優しい言葉でキ

ヤッチフレーズ的なものができて、さらにその下にそれを補足するような、子どもの言葉というか、文章みたいな簡単なものがあると良いのではないかと感じました。

中谷委員：小学校6年間、川崎の小学校に通わせてきて、この前教育長にもすばらしいとお話ししましたが、今回のアンケートもそうですけれども、別にうちの子がすばらしいと言いたいのではなくて、中原区だと中学受験で外に出る子どもたちも結構多いんですけれども、出て気づくことがすごく多いです。今の基本理念・基本目標の「自主・自立」「共生・協働」「生きがいのある人生を送るための礎を築く」というのが、こう書いてあるとそうなんだなって感じなのですが、外に出ていくと、本当にみんな生き生きとしていて、例えばプレゼンテーション1つとっても、みんなちゃんとできるんですね。自分の思いを伝えて、大人顔負けにきれいにつくるとか、そういうこともあります。どうやったら僕たちが考えていること、どうやったら僕たちの夢がみんなに伝わるだろうみたいなことも、できる子ができるんじゃないくて、できないと思われるような子もきちんとできるような形で卒業をしているのを目の当たりにして、たまたま通っている学校だけがそうだったというわけでもなくて、きっとどこの子たちもできるんだろうなと思ったときに、川崎市の教育が本当にすばらしいなと、ここ1年半いて思うので、先ほどもおっしゃっていたとおり、川崎市の今の理念はすばらしいなとすごく思っております。

2つ目の話なんですけれども、とはいえ2050年とか考えたときに、私は72歳になりますし、その2060年になったら80歳になると考えたとき、それぞれ皆さん本気で2050年とか60年になったときに細かいところまで想像できる方ってどれぐらいいるのかなと思いました。私は本を読むのが好きで、本屋に行くんですけれども、2030年はどうなるという本はあるけれども、2050年はどうなるというのは、もう微々たる数になります。それぐらい難しいところを、彼らは2050年になったときまだ30歳なんです。そのときに、どうやって生きていくか考えたとき、おっしゃるとおり教科が云々という時代でもなくなってきていて、そういうときにはやはり先ほどおっしゃったように思いやりとか、コミュニケーションとか、人間的な部分で自分が大好きだから、遊びが大好きだから、どんなことがあってもやっていけるぞという、ちょっと精神的なハートの部分を含んでいけるようなものであるといいのかなということをすごく思います。

加賀市のもやっぱり最後のワンフレーズ「そして社会を変える」といった、僕らが川崎市から何かを、みたいな、そういうのがワンフレーズあると、大人も子どもも頑張っていけるのかなというふうに思います。

小田嶋教育長：資料31ページでいうと、レジリエンスとか、行動力というようなところとつながるようなお話だったかなと思います。

石村委員：多くの委員の皆さんのいろいろな角度から御意見いただきまして、大変学ばせていただきました。

私は組合の立場から発言させていただきますが、ここのグループでもお話ししたのですが、やはりこのプランを拝見する前は、やはり組合には毎日のように学校内外でのコミュニケーションというか、そういったことで相談が寄せられています。その中で、今後どういった力が必要かというときに、組合執行部の中では、やはりタフさであったり、強いメンタル力であったり。そう

いったものがこれまで以上に大事なのかなというふうな話をしていたのですが、資料に記載ある「レジリエンス」という言葉が、そういった力が含まれているんだろうなと感じているので、そういう言葉がしっかりと盛り込まれたというのはよかったなと感じております。

というのも、エピソードの1つになりますが、管理職面接のときに、これまでだったら、例えば私はこれまで国語で専門に頑張ってきましたとか、こういったことができますということを行うことが多かったと思うんですが、1年間休まずに学校に行きますというようなことを言っているのを聞いて、やはり、これまで以上に今SNSであったり、厳しい社会環境の中で皆必死に頑張っているというところもあるので、そういった力を特に、もちろんコミュニケーション能力とか行動力とかチャレンジとか、そういったことも大事ですけど、やっぱりそういう力を養っていくということが大切だと思いました。

というのと最後に、資料15ページにも書いてあると思うんですが、やはりみんなでつくり上げる、つくり上げたら、ぜひ教職員が中心となってやっていくのですが、人員の確保というところは、高いやりがい、高いモチベーションの教職員がやりがいを持って取り組めることにつながりますので、引き続き御支援いただきたいなと思います。

小田嶋教育長：皆さんそれぞれのお立場からに本当に参考になる御意見をたくさんいただけたかなと思います。ここに今出された皆さんの御意見、各テーブルの部分も全体での部分も、しっかりと我々の参考にさせていただきたいと思います。

本日の議題としては、これで終了とさせていただきます。

以下、事務連絡

(19時30分 閉会)